



都風俗化粧傳上



76
1520
1



門 726
1520
7-3

之落こゝ人乃宿寢と
爰より一一夜先は玉
心は海とこゝ知れぬ
沙粒と飛りしと
女をよしと

一、お茶の味をいかに
よくなるか、その方法を
いかにいかにいかにいかに
いかにいかにいかにいかに
いかにいかにいかにいかに
いかにいかにいかにいかに
いかにいかにいかにいかに
いかにいかにいかにいかに
いかにいかにいかにいかに

①

お茶の味をいかに
よくなるか、その方法を
いかにいかにいかにいかに
いかにいかにいかにいかに
いかにいかにいかにいかに
いかにいかにいかにいかに
いかにいかにいかにいかに
いかにいかにいかにいかに
いかにいかにいかにいかに

その方々へは、
とこ城も、
おろし、
おろし、
操ととらへ、

③

清一見、
六丁、
後之尾、
一、
飛ととも

草火あはる濃あ
ちるもや世双あう
あやちうはあう
あうあうあうあ
あうあうあうあ

あうあうあうあ
あうあうあうあ
あうあうあうあ

大原権少将源朝臣重成卿

洋館主人
謹啓

女子 愛敬 都風俗化粧傳 卷之上 目錄

茅顏面之部 目錄

- 於乃色瓜白ふー光はと
- 肌層とこまふー美人半の方
- 鼻の修瓜ふ見する傳
- 目麻のりう瓜上うう瓜
- 目の大瓜瓜うう瓜

- 目の少瓜大う見する傳
- 眉毛目瓜瓜を瓜う瓜
- 口の唇瓜せ瓜う瓜
- 唇の唇と瓜う瓜
- 口瓜瓜瓜う瓜
- 唇瓜瓜と瓜見する傳
- 顔の瓜瓜瓜瓜瓜

○ 顔書目錄

(Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side)



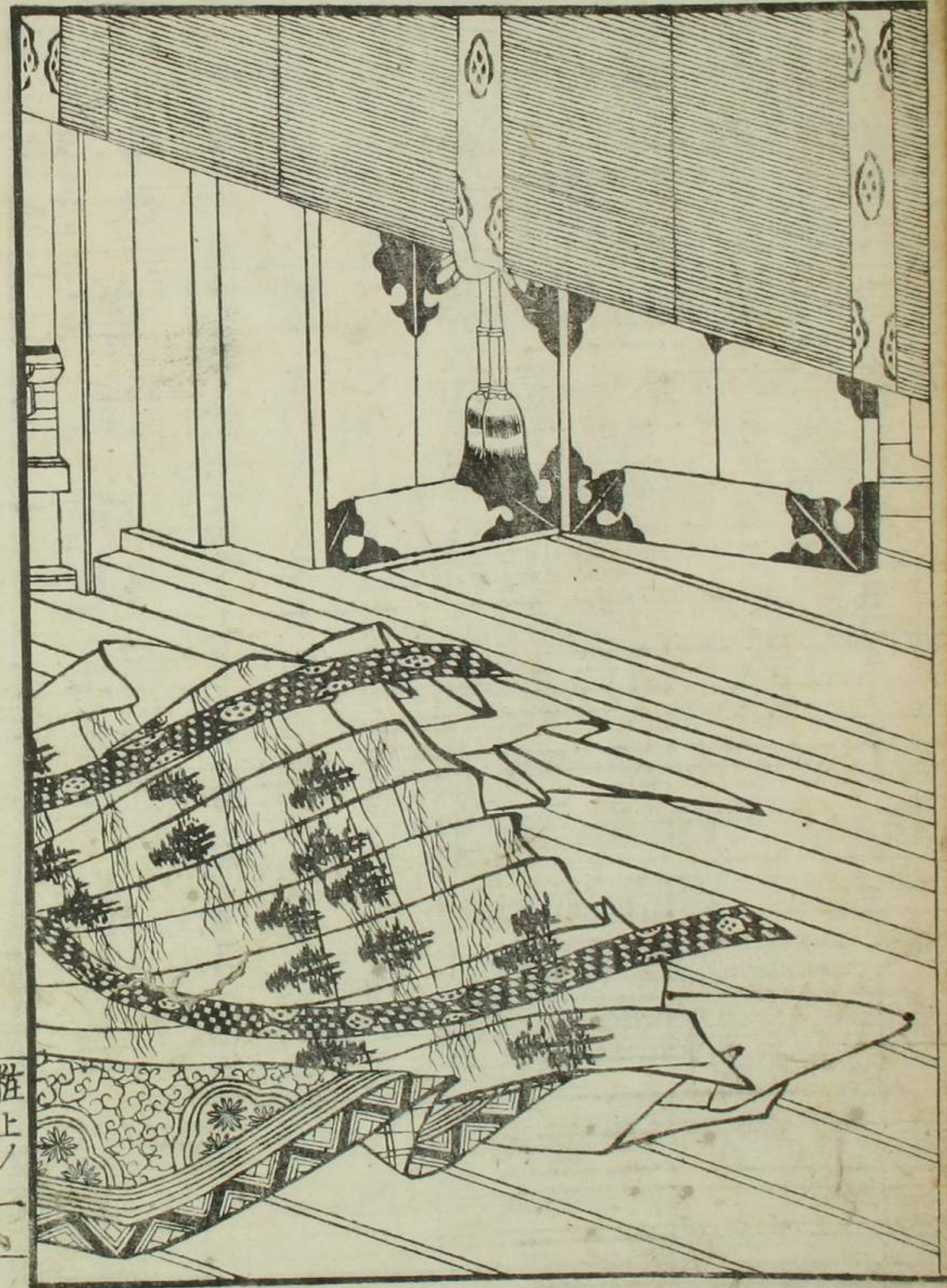
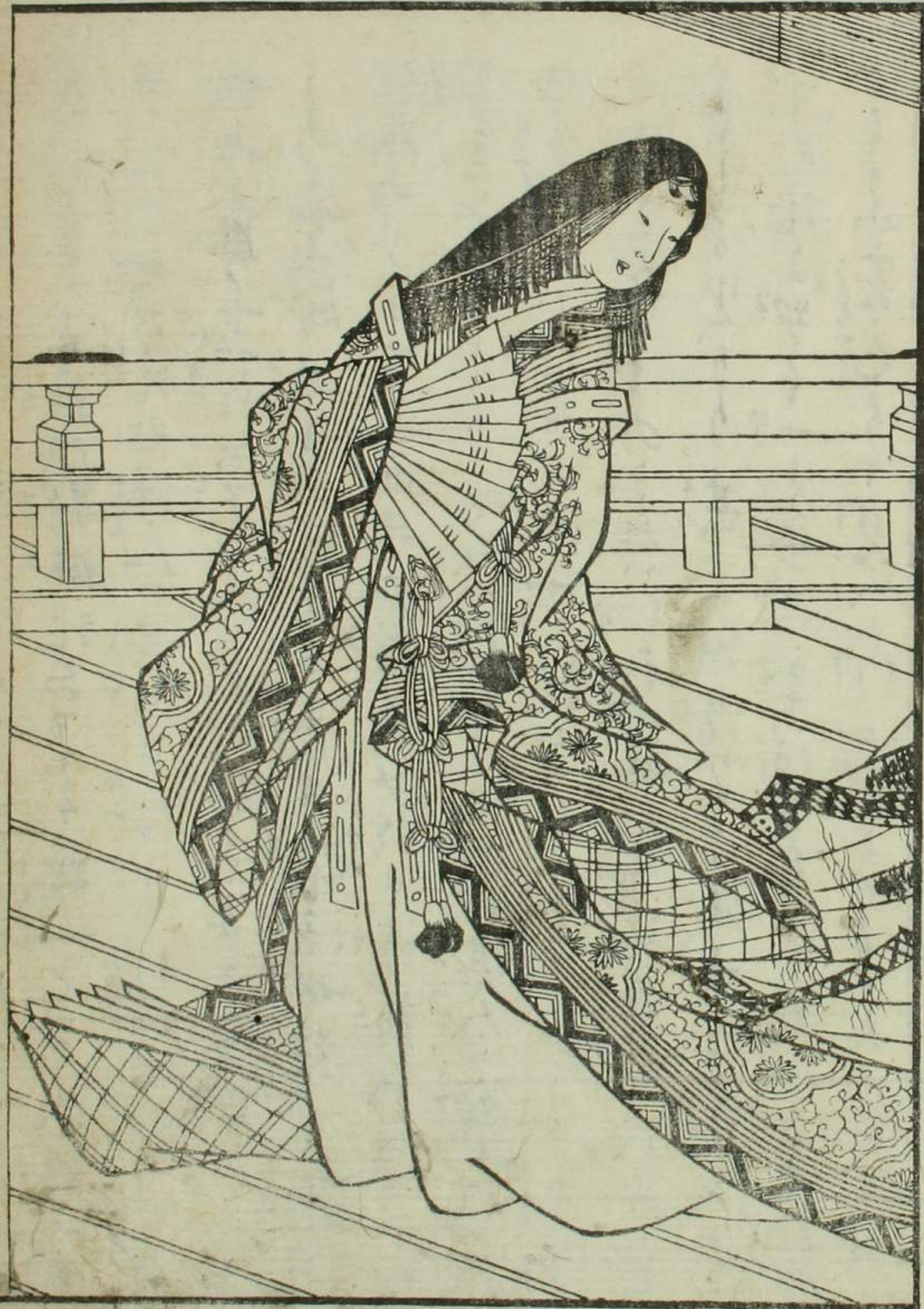
- 面とにせし粉刺しとほらるるまれば
- 崔那氏とほらるるまれば
- 黒髪とほらるるまれば
- 髪をいしとほらるるまれば
- 髪をいしとほらるるまれば
- 髪をいしとほらるるまれば
- 髪をいしとほらるるまれば
- 髪をいしとほらるるまれば
- 髪をいしとほらるるまれば
- 髪をいしとほらるるまれば

- 頭は丸く髪をいしとほらるるまれば
- 髪をいしとほらるるまれば
- 髪をいしとほらるるまれば
- 髪をいしとほらるるまれば
- 髪をいしとほらるるまれば
- 髪をいしとほらるるまれば
- 髪をいしとほらるるまれば
- 髪をいしとほらるるまれば
- 髪をいしとほらるるまれば
- 髪をいしとほらるるまれば

粧上ノ日

女子 愛敬 都風俗化粧傳 卷之上

夫中洲を中華結と名づくる婦女子の身操は
 髪を天懸とくくしきと我河國の風俗なり
 一切の髪をいしとほらるるまれば
 身操の動靜より眉造り紅粉の粧ひしてこころは
 あざむき事に喜ぶる者髪をいしとほらるるまれば
 子の容貌自ら紅粉の粧ひして
 女郎都風俗と名づくる者髪をいしとほらるるまれば
 小生女坊と名づくる者髪をいしとほらるるまれば



雅上ノ一



粧上ノ三

ぐらん其例は圖に依りて作りしは其美しく紀し
 其色を白くし肌膚の密理とこやあましく光
 法とせしは女に依りて法より婦人の
 所嗜はあましく傳授のよきやぞとて記す
 ましれが美の婦女子はあましく千をよも摺るこは
 美の書し習ぶるそのやぶる

壹 顔面之部



○粧鏡の色は白くするまは
 化粧の色は白くし婦女子の色を
 かりしりては鮮白と十人ふまふ人
 あましく或は或は或は或は或は或は
 美する人ありたまは皮膚をあら
 しのりては血淨とせしが故に
 面に密理を白くしは皮膚を
 りよりのいれは洗ひをせらるるも
 せしめたりしもいせり向 瑤滝



粧上五



俄に思ひの戯れに化粧するま
 男子の別して面と臆あるものふ
 目ばかりみる為つうだむらうとて
 きしこに化粧するまのこけり
 は余儀お粧は面とにり一抱は
 てお朝あひとて化粧とれが
 下に敷き面と化粧するま
 行ふのびるはくももを向く
 とる奇女の法をり
 ○三日月に光浴と粧は美作
 孫伝女粧と名く孫夫人とる

まりも 馬馬草
 〇蓬推と名く葉の傳
 白ひめ 白梅
 少すはんご 櫻枕枝
 〇菓子くく 浮草
 小きくく 小自角
 〇菓子くく 小自角
 〇菓子くく 小自角

〇色白く光浴と粧は美作
 揚子丸 秘方内氣控庵 教く名く揚子丸
 半はけ美は用ひく美人の名はく奇伝
 〇色白く光浴と粧は美作
 揚子丸 秘方内氣控庵 教く名く揚子丸
 半はけ美は用ひく美人の名はく奇伝

ゆづりのこ 甚實

茶のこのあふのこ

とらて毎夜やくらねと

ふめりぐー奇切の法

○又法

くらの本れえさ 栗枝

とらて水とあつめや

ちふめりぐーよまろのこ

○又法

ちくもろり 益母料

ちいづる石 嬰糸石

にめけ法を用ひ敷ふ年のけいご女
のせり法ありとありしに法あり

とらてごひ黄腹 ぶらん 甚根

ちらめ 専七ツ

右と毎とらて膏のぶくろー朝起る

とらてゆと面紙あつて廿日とらて

とらて向やー肌膚のさきとらて女

女のけいごろろのせり法に伝の秘方

○は傳

ちもろり 冬丸 一ツ

細ふ切と酒を律の中へ入出火文火て

鞋 上ノ八

ちいづる石 嬰糸石

ちいづる石 嬰糸石

○黒徳と法と傳

ちいづる石 嬰糸石

ちいづる石 嬰糸石

ちいづる石 嬰糸石

ちいづる石 嬰糸石

ちいづる石 嬰糸石

ちいづる石 嬰糸石

湯水の川あがり

ちいづる石 嬰糸石
ちいづる石 嬰糸石
ちいづる石 嬰糸石
ちいづる石 嬰糸石
ちいづる石 嬰糸石
ちいづる石 嬰糸石
ちいづる石 嬰糸石
ちいづる石 嬰糸石
ちいづる石 嬰糸石
ちいづる石 嬰糸石

○色紙のこ

西院白玉膏と名く居士の美人西院

常は此膏を用ひて天下にぬきとらて

と秘し奇方あり

あづき 豆 五合 ちらめ 滑石 一匁

びやくばん 白檀 一兩

○又法

青さんやう 蜻蛉

とらつづ 其汁と付じ

○又法

六月小瓢紙よりして

うらるる 砥石と石

とをいれしとこれと意

入水紙をくくに入し

肉の細糸と入蓋の日よ

干せしと塵のくくくふ

とて 温り紙をけ蓋の

右紙を洗つて篩の海へまじり

洗つた面をさらして又清水のよれ紙

膚をぬらして洗つて

○又法

紙をぬらして洗つて

西院白雲紙と名けしと面の氣血紙

ぬらして解血と紙を紙をぬらして

和膚の蓋紙をぬらして

巾一面と紙の皮と生ごころの紙

らつづ

びやくど田川 白木 四文

どろけしと竹の葉を

其紙をくくけ紙と

其紙をくくけ紙と

やうくく付蓋と

且つて青紙

○又法

巾の切をばなしたる

あれいよもくき紙

其紙をくく紙とあれい

そのけ紙用え通宝の

紙をぬらして

青皮 二文

丹松 七文

白香 二文

志やめん 二文

さんふ 三文

志やくづ 赤豆 廿文

ひきりく 皂角皮 三文

右の紙をぬらして洗つて

して洗つて去り紙をぬらして

ぬらして洗つて紙をぬらして

密紙をぬらして洗つて

のふい 餅菓と十粒程
 さうめんふじしとれ
 たきこり 石の釜の中へ
 へしちりく 釜の中へ
 こぼりり 餅菓
 て 餅菓
 りさた 餅菓
 病のこころなげ
 こころ 餅菓
 餅菓
 餅菓
 餅菓

だん 肉皮膚の肉と
 惟悴 肉皮膚の肉と
 るがく 肉皮膚の肉と
 ○ 白玉の如く 肌膚に
 とこま 肉皮膚の肉と
 顔面 天上 粉と名く
 ぶんだう 菘豆 五合
 清石 一両
 白附子 一両
 白檀 一両
 白芷 一両



かんせう 甘松 一両
 純腦 二文
 右七條より粉して篩こき
 面と洗ふ時面より水を
 のした肌膚より洗つて洗つた
 こすふし 石で肌を洗つて洗つた
 と洗つて洗つた
 ○ 白玉の如く 肌膚に
 清水 一両
 白玉の如く 肌膚に
 清水 一両

○又法

松栲杖とて梳とふて
やじと蒸やきうて
やドふたさけ
ちんてさき
麻の他とて丸梳とふ

○又法

こづつー 木鬘子
つめて梳と供とれが
おろし

○又法

有馬 温泉
ありまのあんまんの湯

○又法

糸のけと布を洗ひにや
りてら梳紅を細くし
て入るた敷を梳とら
る色紙向くころり
白玉のてけ法
人の處女中髪を
み梳とらげ法とつ
て入るひく忽ら
る法し

○又法

色紙白くし肌と
細くお水とを
つて入るひく忽ら
る法し

○又法

細くお水とを
つて入るひく忽ら
る法し

かきく洗ひにや

○又法

昔羅摩
ゆいものつて梳とれば

白くけしと供とれが

おろし

○又法

あませど 合磁

こし也 呉茱萸

怪粉

怪粉

○又法

糸のけと布を洗ひにや
りてら梳紅を細くし
て入るた敷を梳とら
る色紙向くころり
白玉のてけ法
人の處女中髪を
み梳とらげ法とつ
て入るひく忽ら
る法し

○又法

色紙白くし肌と
細くお水とを
つて入るひく忽ら
る法し

○又法

細くお水とを
つて入るひく忽ら
る法し

細粉とて 暖水汁
 の汁を煮て 湯を煮
 へ 垢と為し けし
 まし 付着して 洗ひ
 ぬる 疥癬も 治す
 ○又法
 青ぐらみ 胡椒
 よふ切り 其切口を
 七りて 湯を
 煮る

それより 鼻の両つた 又頬の 両つた 其
 粉の 湯を煮て 湯を煮
 へ 垢と為し けし
 まし 付着して 洗ひ
 ぬる 疥癬も 治す
 ○又法
 青ぐらみ 胡椒
 よふ切り 其切口を
 七りて 湯を
 煮る

白粉 五文
 硫黄 二文
 雄黄 二文
 硫黄 五文
 黄丹 二文
 番星 二文
 密陀僧 二文
 明礬 二文

白粉 五文
 硫黄 二文
 雄黄 二文
 硫黄 五文
 黄丹 二文
 番星 二文
 密陀僧 二文
 明礬 二文

種瓜法と其の傳

こま 相麻

鼻くまにけぐ

○又法

もぐさ 艾

破くそんづめてけぐ

○面皮搔やう

うすし法と其の傳

まわらぐ 生薑

まわりけが物しけ

てら粉と死工け

○同じく鼻法と其の傳

鼻と鼻くまにけぐ

鼻くまにけぐ

鼻くまにけぐ

鼻くまにけぐ

鼻くまにけぐ

鼻くまにけぐ

鼻くまにけぐ

鼻くまにけぐ

鼻くまにけぐ

鼻くまにけぐ

○眼くまにけぐ

あづき粉 赤小豆

破くそんづめてけぐ

○鼻くまにけぐ

傳

ぶつやうん 伏龍肝

かきいの下に厚のけ

つらつて身へ合日

ふらふらあぐ

○唇くまにけぐ

てらひ 青皮

鼻くまにけぐ

鼻くまにけぐ

鼻くまにけぐ

鼻くまにけぐ

鼻くまにけぐ

鼻くまにけぐ

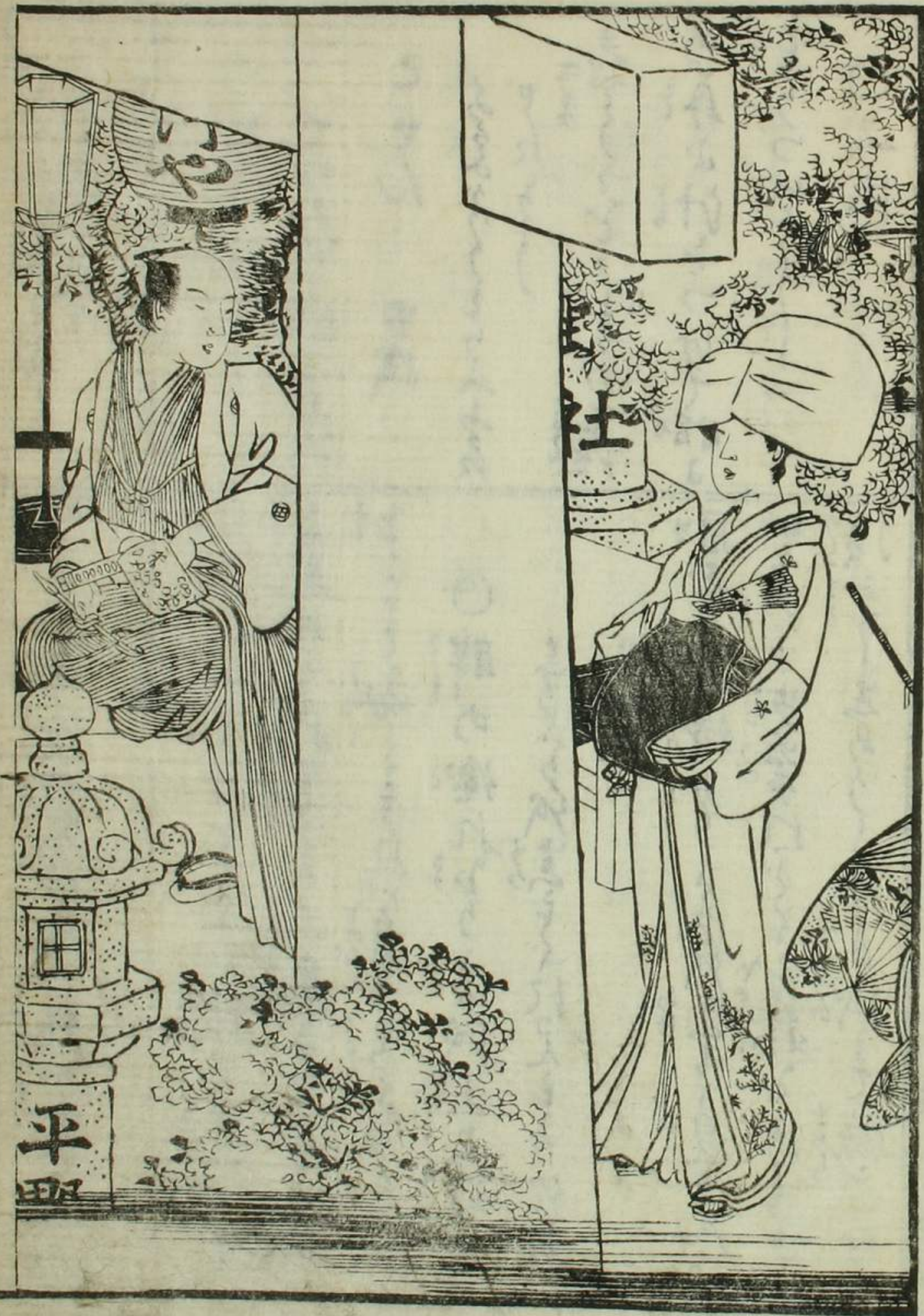
鼻くまにけぐ

鼻くまにけぐ

鼻くまにけぐ

鼻くまにけぐ

鼻くまにけぐ



みくんの香かたばし
なすりやあたり

くらやまうしてはけし

○暴て眼赤くして

ていしと流と毒行

こせん 古残

あまがうらうらうら
ぜんせうり

まきまきとこきげん
の身よけとつけて眼

とらつけとら

○又法

びくろの青女の呪いめく顔のむらさび

○又法

我鼻の両うらと今し折く申指して

お肩のゆれ方より小鼻よりうらと押

りてし初めとれが自らうらとあたり

○眸の倦れりりうらと又眸の

乃傳

目ざりの倦れりりうらと又見んと

おとんと先業れりりうらとめりり

後かきあがりりりうらと眼とけり

さうぬ 豆腐

ゆきもて眼の上の

せとれて

○涙まきりて流

る傳

志不 塩

つるふほふしやく

眼よまらうつけ流あして

洗ふて

○眼赤く涙まきり
と流とら傳

目ざりぬとの方しぬらひ其ゆら

紅気やうらうら肉色みりり

し目ざりれ方とのひうけりり

又眼の下の方の眼へうけりり白粉とぬ

るべしあはる圓気具と知はし

○眸さうらうら眼の眉れつうらと

おとく作り眉さうらとととととめ

小伝るりりりりりりりりりり

○眸のとうらうら眼垂よんとも

のうらうら眼をして流眼より目
あうらうらうらうらうらうら

○ 乾改よち事な

乾 乾と流と事な

大 寸 巴豆

炭やちやあづり他と

うりやして流つこと死

とらつけて

○ 又法

とぶりのひや 馬齒莧

とらつけて

○ 曰く呪の作

小刀のさねをたひの

○ 目の大さうんかそく見せる術

眼之面との中央よりあつて面との極端と

引きさす一のさねをいれがらんとして

がりし極端でもあまり大さうんを

えき言し言はれぬと眼をせんやそ

目尻をいれんとし眼の骨を

てせにりよ敷やととら目分ふり

却る眼乃癖とらとらとらとら

眼を腫れさめり見ると眼の用され

ハ容易く変りごとくもけ法を

常にえねまがりやのつら目とひき腫と

とく 宙

賦 点のよは

のまよとひの平の

鳥とひの平は生

るよへ打とるに

其小刀とよへ

とらつて流しよ

後小刀とら

し

い法よのし其侍の外面のりや

侍の序と目八分と紙入の

分はえ下と

目八分と目八分と紙入のり

ひふれ一房とらとらとらとら

とら時を紙ひとらとらとらとら

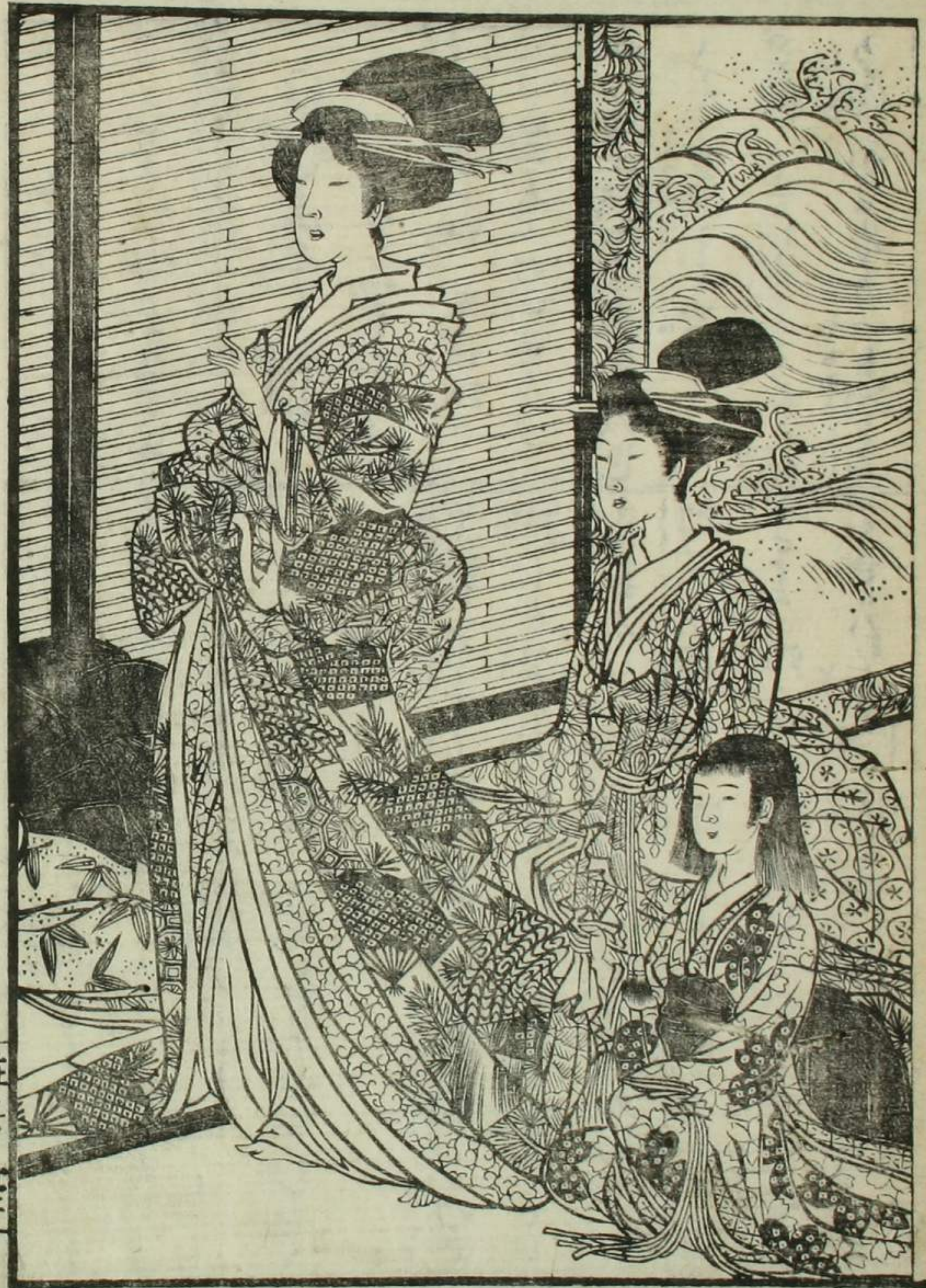
とらとらとらとらとらとら

初のでとらとらとらとらとら

かき見やとらとらとらとらとら

後小刀とらとらとらとらとら

目しならとらとらとらとらとら



粧上ノ九二

○ 毎朝或は辛ふいむ

と後より美の傳

一 月 陸

あつめひ 推しこみ

泣れは涙うろくえて

ゆぐー

○ 虫の耳れ中入る

法と美の傳

こまのちやう 胡天曲

あつめひ 耳の中入る

だつ虫やう又年の中

○ 口唇のあつきはうもふえり

向粉ととら付にうらと

入る紅の付やう口のむら

えり付のむら紅と付る

そねとていふはげろ

向粉と入るおりに

中し七も目ころの内より

紅いさうし 洗うころ

○ 口の狭き紅唇ふん

口の小さない紅の

うくおしてはよせ

○ 鼻赤くやう

法と美の傳

一 月 陸

ほの鼻より下を

とくくは

○ 何のうら

いさう 梳黄

つけあのみ

みちあ

又あつて小なれは

えんと思はれ

大さうえん

外は

○ ねき

顔のうら

いさう

く見え

えん

と目

新うして流水をせ
けぐ

○口中一切の痰

と流す葉の傳

ふー 五倍子

女のくぐらまうふ

とろつけ並に流し

○中野く

流す葉の傳

たまにいらん 生蘿蔔

とろねろけとまわり

新のくぐらまうふ
ばきまきまきまき
かたがたがたがた

とて小葉よりせざるの

利カと入るに葉の

てがーあつてとく

はまけらるのは

葉のせりりのゆへ

かきこもるとい

は葉のせりは

かんまじ

そけとまびく
嗽ぐ

○又法

まやうが 生姜

とろねろけとまわり

て口をせだて

かしのむしり

○率よ古換痛と

海と葉の傳

谷のくは葉

はそとろねろけとまわり

とてまより向新と生
めが葉より生りり
方とのうそに

かの方とのうそ

むしのうの上

けふか

次のまよ

はまのまよ

身のじろり

者つけ

めま



